

平成28年度スーパーグローバルハイスクール構想調書の概要

指定期間	ふりがな	くまもとけんりつみなまたこうとうがっこう				②所在都道府県	熊本県
28～32	①学校名	熊本県立水俣高等学校					
③対象学科名	④対象とする生徒数					⑤学校全体の規模	
	1年	2年	3年	4年	計	全日制普通科	290名
全日制普通科	81	110	99		290	全日制商業科	82名
全日制商業科	30	21	31		82	全日制工業科	157名
全日制工業科	53	46	58		157		
⑥研究開発構想名	「環境首都水俣」に学ぶ水高生から世界への「いのち」の発信						
⑦研究開発の概要	<p>世界が直面する環境問題に対し、水俣で学んだというバックグラウンドを持って提言・議論を行えるグローバル・リーダーの育成を目指し、主に以下の取組を行う。</p> <p>(I) 普通科・商業科・工業科の特色を生かした課題研究のカリキュラム開発及び、アクティブ・ラーニングを通じた水俣病問題や世界の環境問題の学習</p> <p>(II) 水俣環境アカデミアや国立水俣病総合研究センターにおける共同研究、ESD学習のためのスロベニアフィールドトリップや留学生との交流など、実践的な学習</p>						
⑧研究開発の内容等	⑧-1全体	<p>(1) 目的・目標</p> <p>21世紀は、環境の世紀と呼ばれる。地球温暖化、大気汚染といった課題は、1国で解決できる問題ではなく、国際社会が連携して取り組まなければならない。</p> <p>一方、これからの日本の強みもまた、環境分野である。水俣病をはじめとする種々の公害を経験し、その反省と研究・技術革新によって今や世界に冠たる日本の環境技術は、ますます注目されている。</p> <p>本校は、(a)水俣病のような深刻な環境汚染を世界で二度と繰り返さないため、(b)経済と社会の成長バランスを考慮しつつも国際社会が取り組むべき環境対策について、(c)世界と対等に議論し、課題解決に貢献できる人材を育成することを目指す。そのため、思考力・判断力・表現力の養成とリンクした以下の3つの能力を備えた生徒を育てる。</p> <p>〈思考力〉(a)なぜ国際社会が真剣に環境問題に取り組まなければならないか(Why)を知る。</p> <p>〈判断力〉(b)どのような環境問題に、日本としてどのような貢献ができるか(What)を知る。</p> <p>〈表現力〉(c)上記(a)(b)について提言し、世界と対等に渡り合う手段(How)を身に付ける。</p> <p>(2) 現状の分析と研究開発の仮説</p> <p>本校が所在する「水俣市」は、「水俣病」と呼ばれる環境破壊による公害に苦しんだ地域であり、その教訓を基に、環境問題へ不断の取組を続けてきた。平成23年には、全国初となる“日本の環境首都”の称号を獲得し、平成25年には、「水銀に関する水俣条約外交会議」が開催された。そのため水俣の歴史や取組を学びに来る外国人も多い。</p> <p>この水俣で学んだというバックグラウンドは、世界と環境問題を議論するに当たって、大きな強みとなる。しかし、世界の環境問題について、水俣での教訓やこれまでの取組みを基に、伝えたい事柄や根拠を明確にして自らの考えを提案できる生徒は多くない。そこで、上記(1)で示す能力を身に付け、環境問題に悩む地域に貢献する人材を育成する。</p> <p>(仮説 i) 第1学年の「Past MINAMATA ー過去の歴史を知るー」を通じて、水俣で起きた悲劇と再生への取組を正確に理解することで、環境を守る大切さが学べる ((a))。</p> <p>(仮説 ii) 第2学年の「Present MINAMATA ー現在の課題を学ぶー」を通じて、現在、日本や世界が、経済や社会の成長を目指す狭間で、どのような環境問題に直面しているかを学べる ((b))。</p> <p>(仮説 iii) 第3学年の「Future MINAMATA ー未来への提案を探るー」を通じて、日本の水銀研究の成果が途上国でどのように役立っているか等の実例を学ぶことにより、環境問題に悩む国々に貢献するための水俣からの提案能力を身に付けられる ((b))。</p> <p>(仮説 iv) 以上の学習にアクティブ・ラーニング等を取り入れることで、論理的思考力や科学的思考力を高め、課題設定から課題解決に至る力を養成することができる ((c))。</p> <p>(仮説 v) 水俣環境アカデミアの高大連携・国水研との連携・ESD学習等を通して、地域課題の解決に貢献する研究活動の促進や教育活動の充実、知的好奇心の喚起、専門的知識・技術の早期取得、そして専門的知識を有する人材の育成ができる。((a)(b))。</p> <p>(仮説 vi) 英語の授業や国際交流を通じて、ディスカッションやディベート等のコミュニケーション能力を養成することができる ((c))。</p>					

	<p>(3) 成果の普及</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 地元水俣の環境問題を土台に生徒が主体的に探求した多様な環境問題へのアプローチをまとめ、スロベニアや台湾、また県内外の高校生をはじめ、水俣環境アカデミアの慶應義塾大学や東京大学、国際水銀ラボや国水研の留学生と交流し、相互の研究を深めると共に多様な価値観を学ぶ。高校生・留学生国際環境フォーラムを主催し、その成果を発表すると共にホームページでも発信し、成果普及に努める。 ・ 英語版のホームページを作成し、全世界に向けて課題研究の取組状況を発信する。また、海外の連携高校との意見交換の場とする。
<p style="text-align: center;">⑧ -2 課題研究</p>	<p>(1) 課題研究内容 アクティブ・ラーニングを通じた「水俣ACT I」として、水俣病問題や世界の環境問題を学習し、(a)～(c)を学ぶ。また、「水俣ACT I」の課題研究を踏まえた「水俣ACT II」として、水俣環境アカデミアにおける慶應義塾大学との高大連携、国水研との共同研究、ESD学習等の実践的な学習により、(a)～(c)の能力を有機的に結び付ける機会を設ける。</p> <p>(2) 実施方法・検証評価</p> <p>(I) 水俣ACT I (仮説 i～iv) 平成28年度は、総合的な学習の時間及び長期休業期間や週末を利用して、第1学年全学科全クラスで、課題研究に関するフィールドワークや外国人留学生とのワークキャンプ等を実施する。 また、その際に活用するアクティブ・ラーニングについて、生徒の能動的な学習につなげるための指導方法及び教材の開発、教育課程の研究及び評価方法の研究と開発を行う。さらに、ICT機器やAV機器を用い生徒自身が調査学習やグループワーク、ディスカッション等を行い、その結果をプレゼンできる環境整備を行う。 加えて、環境・フィールドワーク・世界情勢に関わる専門家(関係機関・大学・企業・NPO法人等)による講演会や講義も取り入れ、ICT機器を利用したWeb会議も実施する。</p> <p>(II) 水俣ACT II (仮説 v, vi) ア 水俣環境アカデミアにおける慶應義塾大学学生との共同研究 イ 国立水俣病総合研究センターとの連携(高校生研究助手プログラム、「水銀研究フォーラム」・「フューチャーセッション」への参加) ウ 慶應義塾大学や東京大学の留学生、国際水銀ラボのJICA研修生との英語によるディスカッション エ 持続可能な開発のための教育【ESD】の学習(シンガポールやスロベニア・インドリアへのフィールドトリップ) オ 小中学校との交流事業 カ 水俣環境観光ガイドとして実践演習</p> <p>(III) 研究開発を支え、グローバル人材育成を効果的なものにする評価・検証方法及び実施委員会の設置と、成果普及のための成果発表会の開催 ア 生徒、保護者、職員、外部関係者等のアンケートによる評価・検証 イ ルーブリック評価、自己評価による国際的素養に関する項目別評価と検証 ウ 校内Can Do Listによるコミュニケーション能力に関する項目別評価と検証 エ SGH企画部 オ 生徒会SGH委員会 カ 高校生・留学生国際環境フォーラム</p> <p>(3) 必要となる教育課程の特例等 特例なし。</p>
<p style="text-align: center;">⑧ -3 上記以外</p>	<p>(1) 課題研究以外の研究開発の内容・実施方法・検証評価 台湾修学旅行における現地高校生・大学生との英語でのディスカッションなど、実践的な学習を行う。事前指導としてJTE、ALTを交えたコミュニケーションや現地について調査を行い、修学旅行では現地の高校生や大学生と意見交換を行う。また、JNC台湾工場見学を通して、地元企業のグローバルな活動に実際に触れることで、知見を広げる。帰国後の成果発表会で全校生徒、職員、地域住民から評価をいただく。</p> <p>(2) 課題研究の実施以外で必要となる教育課程の特例等 平成28年度においては教育課程の特例を用いない。</p> <p>(3) グローバル・リーダー育成に関する環境整備、教育課程課外の取組内容・実施方法 県教委と連携し、帰国・外国人生徒受入れ体制を整備し、積極的に受入れを推進する。</p>
<p style="text-align: center;">⑨ その他 特記事項</p>	<p>検証評価の方法については、県教育委員会やSGUの熊本大学、県内のSGH指定校・アソシエイト校とも連携し、研究開発を進める。</p>